

C. 生徒指導に関する研究

中野 満男 米山 誠 米田 閔一
丸山 豊 齊藤 真子 高橋 守

〔I〕 はじめてクラス担任をもった一年間

高 橋 守

1 はじめに

教師生活三年目で待望のクラス担任を持つことになった。これからおよそ三十年間続くであろう教師生活の実質的な第一歩である。教師というものは熱意さえあれば、たとえ一年生教師であろうともベテラン教師に負けずできるものだという認識をある程度あらためていかなければならない一年間であった。現在2年目に入り、やはり経験という力の占める大きな割合を痛切に感じながら、初めて担任をもった一年間をふりかえてみたいと思う。

教師という存在の生徒に与える影響というものは大きく、その意味から言って、多種多様な小学校から入学してくる（したがって、まだ明確な集団形成がされていない）本校生徒の一年生クラス（中学）を担当するというのは、自分を試すよい機会であると同時に、非常に責任を感じることでもあった。

新しいことを試みたつもりは毛頭ないが、ただ、初めてということ色々と考え、感じながら一年間を過ごしたことは事実である。この感想記のようなものを綴ってみたいと思う。

2 担任を始める前に考えたこと

本校に着任早々、印象に残ったことがある。それは生徒自らが色々なことを企画し、それを推し進めていくことである。これは本校だけに限られたことではなからうが、少なくとも自分が経てきた中学、高校時代とはいささかちがうものであった。学校が生徒の自治的能力を育てていく役割を負っていることから考えて非常にいいことだが、しかし、生徒の中に自治イコール制約のない自由というまちがった認識ができあがることもあり、それが、授業が行なわれている最中に廊下をうろうろしたり、授業中の生徒から見える玄関先でバドミントンを始めるようなOBを生んでいるのではないかと思った。自分がこう考えた以上、生徒本意

を貫きながらも好ましくない流れをなんとか変えてみることはできないかと考え、とにかく、折り目切り目のはっきりした生徒を育てようと大きく柱をたてた。

次にこれは私固有の見方であるのかもしれないが、自分が高校時代に、自分に非常に近い存在として感じた教師の前では常に身を正していたい、頑張っていたと感じていた記憶をもとに、なるべく生徒に近い存在であろうという気持をもっていこうと考えた。これは特定の人物の前だけでいい顔をすればいいと考えるような生徒を作ってしまうともいえるが、少なくとも、良く育ってくれるきっかけにはなるだろうと考えた。

3

a. ショートタイムについて

本校では6時限終了後、ショートタイムを行なっているが、規定では10分間となっているものの、それぞれのクラスにおいて独得の使い方をしており、教師が連絡事項だけを伝えて終わるクラスもあれば、ホームルームの延長のような形で行なわれる場合もある。私の場合、前年度副担任を担当したクラスの形態をまね、日直が会の進行役をつとめることとした。日直が“これからショートタイムを始めます。明日の時間割変更は……と……です。何か係からの連絡はありませんか。なければこれでおわります。先生、お願いします。”というふうに進めて行く。学校行事等に備えての係や選手等をきめるのも、ほとんどこの会においてであった。困ったこととしては、生徒の集まりが遅いこと—3:00に6時限が終了し、3:05からとなっているのだが、いつも5分か10分ぐらい遅れて始まる—と、教師が教壇に立ってさえ騒がしいクラスなのに、ましてや生徒が会の進行役とあってはせっかく連絡されたことも聞かえずじまいで、私があとで復唱する始末であった。教師がやるより、生徒にやらせるほうが、倍の時間を必要とするということ、あらためて思い知らされた。そのたびごとに説教することになり、おの

ずからショートタイムが長びき、生徒達は自分達が原因になっているというものの、不満を訴えるものが続出した。大声でしかり、その後とくとくと説教したあとはいいのだが、これも三日もたてばもとどおりで、また同じパターンの繰り返しであった。なんとか打開策をと考えた挙句、生徒がみな着席し、ショートタイムを始める態勢が整ったなら、教官室に私を呼びに来るように日直に義務づけた。生徒のショートタイムを早く終わらせたいという気持ちをうまく利用しようと思ったのであるが、やはり根本的に改善するまでにはいかなかった。考えてみると、“新任はしかることをあまりしない。”という言葉に対抗するがあまりの気負いばかりが先行し、生徒をはめて活動させるということが足りなかったようである。また、たとえしかるにしても、何度も口うるさくしかるといのは指導にとって逆効果であることを知った。生徒は私の説教が始まるとひどくうんざりした様子で、ほとんど耳を貸さないものもいたようだ。

その他には、宗教系の学校である私の前任校で全学的に行われていた“沈黙の時間”というものを試みてみた。学校中がしんと静まり返ると色々な音がきこえるし、また、その日一日のことをほんの30秒ほどの時間ではあるが思いおこすのは非常にいいことであると考えたからであった。学校全体とはいわぬまでも、クラスの中が、目をつむることで一瞬の静寂をむかえ、そのときに物思うのは生徒にとって新しい認識を得る場になってくれるのではないかと考えたのだが、うす目をあけるものあり、横の友人をつつくものありで、結局、生徒達の年齢にあったものではないのだという考えに至り、一年の半ばで廃止することになった。

b、いじめっ子、いじめられっ子

前にも述べたように既製の集団なしに出発したクラスではあったものの、この時期の生徒の集団化は非常にはやいもので、一カ月もたつとほぼ集団が定着してきた。するとやはりどの集団にも属することのできない生徒がでてきた。中でも顕著だったAは、動作が人に比べて緩慢で、しゃべり方に少々特徴があるため、いじめられっ子として浮き立ってきた。一挙手一投足を笑われ、なじられたり、いやがらせをされたりした。保護者との連絡をとってみるとやはり、小学校時代もそうであったようで、学区の中学校を選ばずに本校に期待を持ってきたはずであったらう彼の落胆はかなりのものであったにちがいない。

なかば公然化した問題であったので、道徳でとりあげることにしたが、彼ひとりだけを浮き立たせることなしに、“現在あるクラスの問題”と題して作文させることにした。出て来た内容を見るとだれもがAのことについて少なからず述べていた。“一人の子を沢山の子

がよってたかっていじめるなんてことは絶対にゆるせないことだと思います。また、他の子も助けるどころかよけいにはやしたててよるこんでいるなんて、もうがまんできません。”“A君をいじめすぎだと思う。なかまはずれまでしたらかわいそうだと思う。これから一年間生活していくのにひどいと思う。”“ある子が気の強い子に命令されて何かをやっている。けれども決して命令している子だけが悪いのではなく、まわりにおいてあげ口を言う私も十分に悪いと思います。そしてその命令されて言うことをそのまま聞く子も私はとても意志が弱い子だと思います。”などと、彼への批判も一部にあるものの、大半は彼を擁護する意見であった。そこで、この作文のダイジェスト版を印刷し、次の週の道徳の時間に生徒に与え、討論会を行なうことにした。どのような討論が出るか楽しみにしていたのだが、意見のもりあがりは得られず、ただ単に“弱い者いじめはいけないことだ。”というありきたりの結論であっさりと終わってしまった。しかし、この時期からとは言えないものの、彼の行動が、やや、ほほえましくとらえられるようになってきたこともあり、目に余るできごとは減っていったように思う。しかし、気をつけなければならないのは、彼がむやみに他人に迎合していく人間になりはしないかということである。このことについては、彼と個人的に話し、そういうことのないよう、何度も繰り返して言った。

中学生を見ていて、差別的な発言にはっとしたり、人への強烈な攻撃に目を覆いたくなるようなことがある。それに対して、逐一、指導をしていかなければならないことはもちろんであるが、(少々極論ではあるが)子供の世界には、大人の論理的な尺度では測りきれないものが存在して、それが論理を拒絶する。しかし、だんだんと自身のまちがいを感じ始め、ようやく自分の論理として獲得していくところがあるようだ。これは全般的に言えることであって、しばしば大人の論理で子供を見、これが指導の大きな障壁となることもわかった。

c、保護者面談での失敗談

授業、ショートタイムのときの態度や、普段の生活態度にもそろそろ個性が感じられるようになった一学期の終わりごろ、中でも少々目立つようになったのがBという女生徒であった。彼女に一度強く注意したことがある。掃除の時間に彼女は当番であるにもかかわらずジュース売り場(本校ではジュースの販売機を設置している)に行き、友人としゃべりながらジュースを飲んでいたので見つけきつくと叱った。以前から掃除をまじめにやらず、度々注意されていた。また、あるときは、近くの地下鉄の駅のホームで何本も電車を見送ってしゃべっているであろう彼女ともう一人の

姿を車内からみかけた。不良にからまれないために駅などでの待ち合わせを禁じていたこともあって、その旨、(彼女の向席していない)保護者面談の折に、父親にジュースの件もあわせて報告した。彼女は普段から外出するときは必ず、行き先、帰宅時刻を親に言うという、親にとっては非常に安心のできる子供であると父親は言って、全く意外なようであった。家に帰った父親が彼女にひどく叱ったらしく、彼女の友人によれば、彼女は、“あんなひどいことを言う先生はもう嫌だ。”と書いていたという。それ以来、彼女は私の言うことに全く耳を貸さなくなり、生活態度も余計に乱れていくようであった。私に用事があるときも必ず他人を介して言って来た。彼女にしてみれば、保護者面談の席で言いつけられたのは自業自得であるが、自分のいない席でそう言われたのがよほどショックだったのであろう。二学期の末ごろになっても、彼女は僕に対して全く口を閉ざしたままであって、こちらが何を聞こうにも顔をたてかよこにふるだけであった。彼女の友人から彼女がおこっていることを聞いた後も私はお構いなく、何かあればびしびしと注意した。そのうちにわかってくれるのではないかと考えてのことだが、彼女の様子は一向にかわらなかった。しかし、彼女に“自分はいつも目をつけられている。”という意識を持たせることがマイナスになっているのではないかと考え、それからは彼女に対しては極力やさしい口調で接することにした。少々のことでは注意せず、とにかく彼女が口を開くまではと考えた。それでも、二学期の最後の保護者と本人と私の三者懇談でも彼女は腹痛を理由に出席せず、母親だけとの話し合いになった。母親にはこちらが悩んでいるところを素直に話しておいた。

三学期の半ばごろ、彼女の父親が不慮の死を遂げた。親を失くしたのをきっかけに生活態度が目立って悪くなるのはよくあることなので困り果てた。が、なんとか誠意だけは見せねばと思い、一、二度面接をしたが、父親の不幸もあいまって、あまり口を開いてはくれなかった。とにかく、あせらず長い目で見ることにした。

中二への持ちあがり度彼女を再び担任することになったときは、少々、心が重かった。第三者でいられたならなんとかかわだかまりが解けそうな気がしていたからだ。しかし、二年になっての彼女は別人のように明るくなり、私に対しても快活にものを言うようになった。まだ、生活面に多少の問題を残しながらも掃除を黙々とやる彼女の姿にかなりの満足感をおぼえている。必ずしも僕の指導でこうなったわけでもないが、じっくりと腰をすえて待つことの意味を知り、生徒を介さない親への連絡は余程慎重に臨まないと取り返しのつかないことになることも知った。

d、学級活動について

本校においては木曜第6限が学活の時間としてわりあてられているが、その内容は各クラスにまかされている。生徒が比較的自分達で動いていくのでそれに任せていることが多い。しかし、注意せねばならないことは、学活の時間は何でも許されるという認識をもたせないことである。他校でもあることかもしれないが、料理の時間になったり、ジュースやお菓子を用意し、“……の会”と称して飲み食いすることもある。これらが料理をみんないっしょにやってみよう、会を盛り上げるためにジュースやお菓子を用意しようという意図からのものであれば、止むを得ないことなのかもしれないが、ともすれば“授業中にお菓子が食べられる”という意識につながりはしないかと考え、そういったものはなるべく避けようと考えた。

このように娯楽的色彩の強いものは生徒の余程しっかりした企画がないかぎり取りあげなかったこともあって、かなり教師主導型のものになった。しかし、こうなってくると、教師の企画力がかかなり必要になってくる。毎週、毎週、この学活の内容を考えるのが課題となった。たいした企画力があるわけでもない自分にはかなり荷が重く、他のクラスの例を聞いてはそれをまねるというふうに過ぎていった。自分で企画するあまり、準備から後片付けまですべて教師中心であった。他クラスの企画溢れる学活をみていると、生徒に企画力をつけさせ、発揮させていくのが学活の時間であると痛感した。

e、服装等の指導について

服装によって生徒のその時の興味の方向がよくわかるのだが、それを正しいと思われる方向に指導するのに色々迷うことがあった。指導すべき項目として、靴下の色、帽子のかぶり方、かみかざり、かばんの厚みなどがあげられるのだが、これらには明確な限度というものが無い。ただ、見ていてよいものではないとか、そういった格好をしている生徒に問題になる生徒が多いということの理由で注意するのだが、これには説得力がない。たしかに服装が乱れてきた生徒には問題になる生徒が多いのだけれど、必ずしもそうでないものがある。考えてみれば、服装の乱れがない生徒でも問題になる生徒も少数だが存在するはずであることを考えれば、服装によって生徒にレッテルを貼ることにより生徒に知らず知らずのうちに被差別意識を持たせてしまうのではないかと考えてしまう。持ち物検査や服装検査をしてはみたものの、こんな迷いから十分な指導ができなかった。

f、クラス日誌について

自分の高校時代の学級日誌は今の形と全く同じであったが、そこには色とりどりのインクで多種多様なことが書かれていた。授業や教師に対する意見がびっし

りと書かれていた覚えがある。時には教師が担任所見欄では書ききれず余分に紙をつぎ足してまでも書いていたことがあった。こんな学級日誌の利点が班ノートやグループノートに受けつがれてきていると思うのだが、グループノートを一年間続ける自身がなく、学級日誌においてそんな場を作ることにした。

なるべく賑やかなものとするために、思ったことを飾りなくどンドンとぶつけることにした。話題作りをするために、下手な川柳を毎日一句ずつ作って書くこともやってみたが、ついに一年間期待されたものは出てこなかった。毎日、日直所見欄には“今日の……の授業はうるさかった。”“今日の……の授業は比較的静かだった。”ということぐらいしか書かれていなかった。現在、二年目の担任で班ノートを作っているのだが、これが同じ生徒なのかと思うぐらい豊かな発想でノートを埋めていく。生徒が一年の間に変わったことも考えられようが、やはり、きちんとマスがしまされたものに自由な発想でのびのびと書いていくことが中一の彼らにとっては勇気のいることではなかったかと今考えている。この点において班ノートと学級日誌はおおいにちがっていると思う。

また、言葉の点においても考えるところがあった。自分をより強く表わしていくためには対象が中一だからといって、より簡単な言葉を選ぶことはあえてしなかった（無論、教科の授業においては許されないことだが）。これは意見のわかれるところであろう。しかし、同僚の教師との話の中で“中学生のとき、先生がむずかしい言葉で話してきたとき、自分は先生と同等の立場にいるのだという気持をもち、たいへんうれしかった。”ということを知り、その意を強くした。

g. 文化祭へのとりくみ

本校では中高併設であることから、中学校においても文化祭をかなり大がかりに行なっている。毎年10月ごろに行なわれるので、クラスにとってはひとつの区切りになるときであり、また担任にとってはそれまでのクラス運営を顧みるいい機会でもある。中学校の主な催し物としては、合唱コンクールと演劇コンクールがあった。自分としては合唱や演劇の発表を通して、生徒らにひとつのことをまとめあげていくことのむずかしさ並びに、公けの発表の場での緊張感とその後の充実感とを味わわせることを主目的とした。

この文化祭においても教師主導型にならざるを得なかった。それまでのクラス活動における積み重ねの無さもさることながら、生徒の手に委ねてもし満足な結果が得られなかったとしたら彼らに無用な敗北感だけを残すことになるかもしれないと考えたからである（無論、その敗北感こそが次へのエネルギーを生むことになるのかもしれないが）。練習時における合唱の

指揮者、演劇におけるシナリオの作成から舞台道具の作成までほとんどのことを手がけた。色々悩んだり、困ったりしたこともあったが、ひとつのものを作りあげていくことの楽しさをいちばんよく味わったのは自分自身であったのではないかと思う。45人の生徒の前に立ち、45人の歌声をまとめあげていくことに大人の世界ではなかなか味わうことのできない集団としての力を大いに感じた。この時ほど教師になってよかったと考えたことはない。

しかし、生徒の意識はいまひとつ盛りあがらず、やらされてあることの息苦しさみたいなものを感じているようであった。“今日の授業後は合唱の練習だ”とこちらが意気盛んに言えば、“またか!!”“もう練習なんてしなくてもいいわ”などと文句が盛んに出る。こんなときはこちらが勢いにまかせてむりやりに練習をさせることになるのだが、もし生徒達がはっきりした目的意識を持っていたなら、こんなことにはなるまいかと根本的な生徒の導き方というものになにか足りないものがあるのではないかと考えさせられた。

発表当日の朝には、激励の意味を込めたプリント(クラス新聞である“毎週新聞”の号外と称した)をつくり、生徒達の机の上に配っておいた。まるで自分が発表するような気分であった。とくに演劇の発表では、開演寸前まで道具のチェックをし、いざ始まると、生徒達の写真を撮ったり、音楽担当のところへ行って音量の調節をしたり、はては舞台裏へ入りあれこれとわかりきったことまでも指示をしたりとの連続で、ゆっくりと鑑賞するひまなどまるでなかった。冷や汗とあぶら汗の20分間であったが、それだけに充実感はこのほか大きかった。その充実感を生徒と共に味わい、また積極的に生徒達を評価するために、すぐさま毎週新聞号外を作成し生徒達に配った。生徒達はお互いを評価しあいながら大いに満足げであった。それを見るにつけ、むりやりにでも練習をしてきた甲斐があったとつくづく感じた。

練習や準備の過程において普段の授業では見られないような生徒の一面を見ることができたのも大きな収穫であったと思う。普段は目立たない生徒が黙々と演劇の道具を作っている姿を見て、これから先々、決して前面に出てくるものだけを評価してはならないことを実感し、生徒の前でも積極的に評価するようになった。

生徒達が練習を嫌ったのは、ものをつくることの楽しさを実感として持っていないことにあると思う。思えば自分が歌うことの楽しさを感じはじめようになったのも高校時代であった。彼らが、演劇を組み立てていくことの楽しさ、合唱することの楽しさ、絵を描くことの楽しさなど創造することの楽しさを感じていたならもっとすばらしいものになっていたと思う。中

学一年生には無理なことかもしれないが、しかし、音楽や美術の時間があるのだから、そんな教科が“歌わされる”“描かされる”というような時間に決してならないように我々教師は努力していかなければならないと考えている。

h、しかることとほめること

前にも述べたように“若い先生は生徒にあまい”というまわりの言葉に対抗しようとしたがあまり、生徒に口うるさくしかることが多かった。まわりの言葉だけでなく自分でも“しかることによって生徒はよくなる”という意識をもっていたからであろう。しかし、それがいき過ぎて、“しかなければ生徒はよくなる。”ということにまで発展し、果ては、“何かしかることはないだろうか”などと、まるで本末顛倒な状態になっていたきらいがある。それに比べて、“何かほめることはないだろうか”と考えていたことはまるでなかったように思えてならない。そのために生徒の中にはめられようとする積極的な雰囲気よりもしかられずにおこうという非常に消極的な雰囲気を育ててしまったことを後悔している。“しかるときは一回で、ほめるときは何回も”という気持ちをもっていかなければならないと強く感じた。このことは自意識の強い子供に対するときには特に言えることで、教室において他の生徒の前でしかると決して素直に反省しようとしな。しかし、個人的に呼んでこちらと一対一で話す非常に素直になってくれるものだとなった。彼らをうまく指導するためには彼らの行動を積極的に評価することで自意識のエネルギーをうまく導いてやらなければならない。

子供と大人の感覚のちがいがということも強く感じた。こちらがひどくしかり、そのあとで、“ちょっと言い過ぎたのではないだろうか”“生徒は自分のことをどう思っているのだろうか。”“次に生徒に対するときにはどんな態度を示したらよいのだろうか”などとよくよく考え、これから先のことを心配してしまうのだが、教室に行ってみるとまるであっけらかんとしている。それによって自分の気まずさがとれ、生徒に助けられる場面が間々あった。しかった事実を最後までフォローしていくことは大切なことであるが、尾を引くようなしかり方や、こちらがいつまでもよくよしていることは指導していく上でマイナスであることを生徒に教えられた感じがする。

i、教室にいる時間の長さについて

はじめに“生徒になるべく近い存在でしよう”と思っていたのにもかかわらず、必要な時を除いては教室に行くことをほとんどしなかった。これは、教室へ行くことによって生ずるであろう余分(決してそうでないはずだが)な仕事を無意識に避けていたようであり、

非常に反省すべきことである。下校時刻頃になって、自分の教室の戸締まりを見に行くこともなかったし、昼の放課に顔を出すこともしなかった。この反省から二年目の現在は昼食を生徒と一緒にとることを自分に義務づけている。これには、ただ生徒と話す時間が増えるという利点だけではなく、教室内の汚れ、掲示物の乱れ、修理を要す箇所、自由時間の生徒の様子など様々なものに目を配ることができ、それに対して否が応でも対応せざるを得なくなってくるという利点がある。授業後の教室に目的なくふらりと出かけ、そこにいた生徒と下校時刻まで話し込んでしまうなどということが皆無に等しかった。

教室にいるよりも職員室にいるほうが楽だというなまけた気持ちから、教室に行くことを最小限におさえようという気持ちが無意識にはたらいっていた。このため清掃のときなども、帰りのショートタイムの時間に“しっかりそうじをするように”と言うだけで、それを最後まで見届けるということをやあまりしなかった。中学一年生の子供達がそんな言葉だけでしっかりやっておくはずがないと、薄々は感じながらもそのまま見過ごしてしまっていたことは、怠慢ということ以外のなにものでもない。そうじだけにかかわらず、何事も最後までフォローしていく姿勢を持っていなければならないと感じた。

4 終わりに

べつにまとまった研究をしたわけではなく、ただ単に新担任として一年間に印象に残ったことを羅列したにすぎない。しかし、この貴重な一年間をこれを書くことによってふりかえることができ、教師としてのより良い姿勢を模索する場になったことだけは確かである。

やや自己中心的な自分が子供を見ていくことによって大人としての見方ではなく、子供としての目というものを思い出し、そういった子供の立場で物を見ていくことの必要性を痛感した。

また、頻繁におこっている校内暴力などを耳にするにつけ、教師によって生徒がどれだけ変わりうるのか疑問に思わざるを得なくなる。しかし、“忘れもの多いクラス”“落ち着きのないクラス”“まとまりのないクラス”ができていったことが自分の教育姿勢ひいては生き方を完全に反映しているのだと痛切に感じている今、それ自体は残念なことではあるが、やればやっただけ何かが変わっていくはずだという認識を得たことは今後の教育活動において大きな原動力となってくれたと感じている。